

『テアイテス』における思考の対話的性格について

郷家 祐海(慶應義塾大学)

プラトンの『テアイテス』において、「思考(διάνοια)」は「魂が自らに問いまた答え、肯定しまた否定しつつ対話すること(διαλέγεσθαι)」であると規定される。そしてこのように規定された思考がなんらかの確固たる主張を形成するとき、この思考は「判断(δόξα)」と呼ばれる(189e6-190a7)。

しかし、この思考についての規定が『テアイテス』の議論の文脈においてどのように位置づけられるのかという点については、解釈が一致していない。また、この規定そのものの妥当性についても、十分に問われていない。したがって、本発表はこの二点について考察することを目的とする。

『テアイテス』において「思考」の規定が登場するのは、「知識は真なる判断(ἀληθὴς δόξα)である」という定義(第二定義)の妥当性が検討課題とされる『テアイテス』第二部(187a-201)である。この第二定義の妥当性を検討するための議論の大半は「虚偽の判断は可能か否か」を問う議論にあてられる。これは、ソクラテスが「真なる判断」について検討する前に、そもそも「虚偽の判断」が可能なのかどうかということの問題として取り上げるためである。しかし、ソクラテスはこの議論で、虚偽の判断およびその対象をどのように捉えるかについての5つのパターンを挙げ、そのすべてで虚偽の判断が可能であると示すことに失敗してしまう。そのため、これら一連の議論は研究上「虚偽判断についての難問」とも呼ばれている。そして虚偽判断を「取り違え(ἀλλοδοξία)」だと仮定する捉え方に基づいた第三の難問が検討される過程で、「思考」とは何か規定される。

既に述べたように、この思考についての規定が『テアイテス』の議論の文脈においてどのように位置づけられるのかという点については、解釈は一致していない。これは、魂の内的対話としての思考というソクラテスの規定が唐突に登場する印象を与えるということにも起因している。この思考についての規定が第三の難問以降の議論におよぼす影響は定かではない。たしかに、『テアイテス』全体の主題や「知識はロゴスを伴う真なる判断である」という定義が問題となる『テアイテス』第3部に対する影響を指摘する研究もあるものの(e.g. D. Sedley, *The Midwife of Platonism*, 2004; F. Trabattoni, *Essays on Plato's Epistemology*, 2016)、いずれも説得的な解釈の提示に成功しているとはいえない。

さらにいえば、思考を魂の内的対話だと規定することが、第3の puzzle 難問のなかで「虚偽判断は不可能である」という受け入れがたい帰結を招く要因となっている可能性が指摘されている。たとえば J. マクダウェル(*Plato: Theaetetus*, 1973)によれば、思考を対話と規定することで、「判断」と「主張(assertion)」とが強い関連性をもつことになる。このことによって、ある判断と、その判断のなかで登場する語の同定という二つの認知作用の関係を捉えそねることに繋がるとマクダウェルは考えている。

また本発表の目的の二点目については、思考を魂の内的対話だとする規定そのものに問題があるのではないかと、という疑念が先行研究によって指摘されている。この思考に関する規定について、M. F. バーニェット(*The Theaetetus of Plato*, 1990)は、二つの想定反論を挙げている。(1)この思考についての規定は、思考をもっぱら知性的な側面から描写しており、われわれの日

常的な思考一般、とりわけ実践に伴う思考や幼児の思考といった側面を見過している。(2)外的発話(speech)と内的発話とのアナロジーを重視すると、思考を内的発話と同一視することは難しくなる。たとえば、われわれの日常的な発話において、われわれは他人に何かを教えたり、欺くといった多様な言語行為が見いだされる。また、外的発話において発せられる言語表現は、発話者の意味しようとする内容をつねに十分に言い表せるわけではない。このような外的発話の特性は、内的な発話においては見いだされない。また上記のような外的発話の特性を内的な発話に見出そうとすると、そのような内的発話と判断との関連は薄れてしまう。

以上のようなマクダウェルやバーニェットの指摘する問題は、思考、判断、主張の三つの関係について再考を促すものである。その一方で彼らの議論は、『テアイテス』において思考を魂の内的対話とする規定のポイントのうち、「主張(assertion)」や「発話(speech)」という言語的側面が思考や判断と不可分なものだという点にのみ限定して言及している。

これに対して本発表は、判断が形成される前の思考過程において、魂が自らに対し「問いまた答え、肯定しまた否定」という記述に注目する。これは、思考や判断がたんに言語との密接なかわりをもつという点だけでなく、ひとつの判断において「肯定」と「否定」という二つの側面が密接にかかわっているという点が強調されていると考えられる。本発表はこの判断における「肯定」と「否定」のかかわりについて詳細に検討しつつ魂の内的対話としての思考という規定を積極的に評価することを試みる。